

## 研究発表要旨

### アンドリュー・マーヴェルの「庭」に見るミツバチの象徴的意味

篠原かをり

ミツバチ、特に高い集蜜能力をもち、世界中で養蜂に用いられているセイヨウミツバチ (*Apis mellifera*) は、その副産物であるハチミツの魅力や、分業制の高度な社会を構成するという生態的特徴から、西洋圏、特にキリスト教的価値観において、重要視され、創作のモチーフとしても用いられてきた。しかしながら、しばしば過度な投影によって、実際のミツバチ像から懸隔している例も多く見受けられる。昆虫としては異例なほど、人々からの関心を集めてきたミツバチの文化表象を理解することを目的とし、アンドリュー・マーヴェル (Andrew Marvell) の「庭」 (“Garden”; 1681) に登場するミツバチが持つ象徴的意味について考察する。

本研究では、「ピューリタンの理想としての勤勉・勤労のアイコンとしてのミツバチ」「エコロジー的役割としてのミツバチ」「男性モチーフとしてのミツバチ」「純潔性の象徴としてのミツバチ」の4つの観点から、ミツバチという昆虫の生態的特徴及び、当時の科学的理解と照らし合わせ、「庭」の中でミツバチがどのような役割を果たしているのか分析していく。

### モンテスキュー『わがパンセ』における「嫉妬」の政治性

齋藤 山人

モンテスキューにおける「嫉妬」の問題を取り上げる際、多くの研究は『ペルシア人の手紙』におけるハーレムの表象に注目してきた。それに対して、まだ研究が十分に進んでいない『わがパンセ』には、『嫉妬の歴史』と題された幻の著作の痕跡が断片的に示唆されている。この著作は、モンテスキューの主著を読み解くための補足的テキストとしてしか用いられない傾向があるが、その中には『ペルシア人の手紙』や『法の精神』に還元できない思想も見られるのではない。以上のような仮説のもとに、『わがパンセ』における「嫉妬」の問題の射程を分析し、それが政治的なものとどのように関わっているのかを明らかにする。

### 「羅生門」から ‘Raşomon’ へ：日土翻訳における読みの変容

藤田 晃代

西洋近代の小説手法を駆使して数々の名作短編を執筆した芥川龍之介 (1892-1927) による「羅生門」(1915年初出) は国語教科書にも掲載され、追い詰められた人間のエゴイズムを描いた物語としてたいへん有名な作品であることは言うまでもない。今回、近代日本文学におけるこの有名作品をトルコの日本文学研究家メレッキ・チェリッキ (Melek Çelik) による翻訳 ‘Raşomon’ と読み比べ

ることで訳語の選択からあらたな読みの可能性をさぐる。とくにトルコ人読者にとってなじみの薄い中世日本、平安時代を舞台にしたこの短編小説において、イメージを喚起するための訳語選択の意義について考察をする。

「羅生門」の主人公である「下人」はトルコ語版では「年若い男性召使い」や「少年」を意味する ‘uşak’ と訳され、この ‘uşak’ の視点を中心とした語りで読みなおすと、年若い男性の自立の物語という側面が見えてくる。本発表ではまず、比較的古くから行われてきた日本文学の英語訳から論を始め、トルコにおける日本文学の受容やその人気を日本映画との関連からも紹介したい。